



日本の命運を担う小児科医

日本小児科医会会長

内藤 壽七郎

1.53の数字、つい先達は1.57といわれた時、心ある人は眉を顰めたばかり。ある民族の数を一定に保つには2.1という出生率(出産可能年齢女性に対して)が必要とされているのに、これに近づくどころか世界に類を見ないといわれる速さで減少して止まるところを知らないかに見える。

一方、65歳以上の高齢者の増加の速度も他に並ぶ国もない早さであると報ぜられている。現在は5人の稼働年齢者が1人の老人を支えている由であるのが、十数年のうちに3人で支えなければならなくなると。20万円余の年金を5人で分担しているとすると1人4万円、それが7万円くらいになってしまうということである。それにはよほどの気力と体力ある稼働者を育て上げる必要があろう。

今周囲の子供達の様子を見ると、現在の稼働者に匹敵する気力、体力を備えた未来の成人像を、多くの子供達に期待できるであろうか。

年々増加している不登校児の数、これこそすでに気力喪失の人間になってしまったのではあるまいか。都会の子供に多いと思われる集中力の少ないものの数も増加傾向をつづけている。

そのようなことは何ひとつ心配することはない、機能のいいロボットをたくさん造ればいいと考える人もあるかもしれない。作られたロボットは自らやろうとする気を起こすことはないし、年を経れば古くて間に合わなくなる。新しい機能をもったものを考えなければならないだろう。

わが国の工業、あるいは電子工業もほとんどが外国の真似で絶えず訴訟問題を起こしている。

なぜ創造能力豊富な人間が少ないのか、これはあまりにも幼児期から子供達の脳の発達を阻害しやすいしつけに甘んじたことに大きな原因がありそうである。成人後、脳の自在な思考のできる脳の芽の発達を阻害しないしつけ方を幼児期に母親達に接する機会の多い小児科医が指導してこそ21世紀の日本は明るいのではあるまいかと切に思うことである。